

会津戦争の知らなかった一面

大津 隆文

行けども行けども車窓から見えるのは雪景色ばかり、そんなロマンに長年憧れていた。そろそろ実行しないと時間切れ、と思い切って実行。東京から新幹線で郡山へ、磐越西線に乗り換え会津若松で一泊、翌日は念願の只見線で新潟の小出へ、最後は浦佐から新幹線で帰京、というコース。雪で運休になつては困るし、雪が溶けてしまつては無意味、と日程は迷つた末二月末とした。幸い晴天に恵まれ雪景色を堪能することが出来、俳句もひねつた。

会津若松は初めてなので、まずは鶴ヶ城、飯盛山を訪れた。心に浮かぶのは会津戦争に敗れた会津藩の過酷な運命。京都守護職を務めた会津藩を戦争に追い込み、降伏後は下北半島に移住させた新政府の苛烈な処分。水に落ちた犬を打つような扱いではないか、その遺恨を会津の人達はどう乗り越えたのであろうか。

そんな思いを抱きながらあれこれ情報を探していたら、自分の知らなかった会津戦争の一面、異なる視点が出ていた。

その一は、戦後の処分は厳罰論が強かったが、官軍の主将板垣退助が穏便な処遇を主張、これが容れられ結果として藩主の松平容保は死罪を免れた。後年多くの会津人が感謝の気持で土佐を訪れたという。

その二は、会津藩というのは一体と思っていたが、藩は藩士中心で領民は差別され重税に苦しんでいたとの説。このため一体感はなく、藩主が江戸送りになったり、藩士達が斗南藩に移住することにも領民は冷淡だったという。

その三は、プロイセンからの借款問題。会津、庄内藩には資金調達のため、所領の蝦夷地を担保として同国に九十九年間提供する計画があり、ビスマルクも交渉を認可していたとのこと。全く危うかった、戦争が早く終結して本当によかったと思う。

宿の露天風呂からは、雪で白銀に輝く飯豊連峰が真に神々しく見えた。浴室の壁に掲げられた「あいづっこ宣言」の結びは、「やってはならぬ やらねばならぬ ならぬことは ならぬものです」。これぞ会津の面目（謹直時に愚直）と感じた。